



藤井浩人月私マガジン

2021.5

5月になりました

暖かい日が続き、顔を上げるとお家の藤棚や、山々には藤の花が綺麗に咲いている様子を眺めることができます。

多くの人にとっての大型連休は、今年もコロナの影響により、自粛を求められる連休となってしまいました。

岐阜県は4月23日に県独自の非常事態宣言を発表し、美濃加茂市を含む9市の飲食店に5月11日までの営業時間短縮が要請されています。

世の中の雰囲気として、ワクチン接種が待たれる状況となっていますが、世界各地ではワクチン接種が進んでもコロナの感染拡大に歯止めが効いていない国がいくつもあります。ワクチン接種に過度な期待を抱くだけではなく、長期的な視点で感染症とどのように付き合っていくのか一つ一つ考えていく必要があると考えます。

特に、日々の成長が著しい子どもたちにとっては、一日一日を過ごす時間はかけがえのないものです。先の見えない閉鎖的な日々を強いるのではなく、健康や感染症対策と向き合いながら、可能な限りの環境を提供していくのが大人たちや社会の役割だと思います。

私たちの食や農について

次男が生後5ヶ月半を過ぎ、離乳食を与えられるようになりました。

今回は、地元蜂屋町で「無農薬、無肥料」で作られたお米をお粥にして食べさせました。

「食」や「農業」について、この数年多くの知識を得るように心がけていますが、食の安全について、日本は世界中の基準からはかなり遅れており、その原因は消費者の意識が大きいと感じています。私たちが、どのようなモノを選ぶかによって、作り手や流通の選択も変わります。

また、世界を視野に入れると、まもなく食料の生産が人口増加に追いつかない時代へと突入します。今回のコロナワクチンの接種状況で明らかとなりましたが、日本の世界における競争力はすでに大きく低下しています。総理大臣が海外へ乗り込み、お金をいくら積んでもワクチンが海外から入ってこないのと同様に、食料が足りなくなるような事態となったときに、日本に必要な食料は海外からは入ってこないでしょう。

美濃加茂市のような、自然や農業が可能な環境が残っている地域が未来に向けて、どのような選択をするべきなのか大きく問われています。

私たちの毎日の食事と社会との繋がりを今一度皆さんと考えてみたいと思います。

藤井浩人